

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 25 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530667

研究課題名(和文)メディアの表現構成における社会的規範を通じた理解の実践に関する研究

研究課題名(英文)Study of information practices of processing media representations

研究代表者

是永 論 (Korenaga, Ron)

立教大学・社会学部・教授

研究者番号：50275468

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、メディア上に見られる表現の理解を人々がどのように行っているのかについて、主に表現が制作される場面や、その実践に関わる人々を対象に解明するものである。短歌、写真、商業マンガを対象として、エスノグラフィー、インタビュー、ビデオ分析といった調査手法を用いた。それぞれの表現について、理解に関わる独自の実践と、それにとまなう規範があることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This research explores how people accomplish the understanding of media representations. We have conducted ethnographic research about people discussing tanka, the Japanese traditional poems and processing photo images in addition to in-depth interviews to professional cartoonists. The research has unpacked the unique practices regarding the understanding of media representations.

研究分野：社会学

キーワード：メディア表現 規範

1. 研究開始当初の背景

メディアにおいてなされる表現が、人々の現実認識といかなる関係を持つかについて、従来の社会学においては、主に効果論に即した観点から、暴力や差別・ステレオタイプなどについて、メディアが特定の傾向を持った表現を通じて人々の現実認識に作用するという、考察図式が取られてきた。

こうした表現による「現実認識」への直接作用を自明な前提とすることの困難は、実際の表現規制への反対の動きなどにおいて、規制が現実認識に効果をもたらすことへの疑念とともに示されてきた。

その一方で、受け手が表現上の事実を、自らの周囲にある現実とまったく関わらず、常に虚構として見なしているわけではないことから、現実と虚構の二項対立と異なった形での考察が必要とされる。

2. 研究の目的

本研究は、ウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーによる規範概念を手がかりに、メディア上における表現構成と社会規範が持つ関係を明らかにすることである。ここでいう社会規範とは、人々が現実社会の中で日常的な認識や行為をおこなう際にしたがうものを指す。本研究により、メディアがその表現構成を通じてもたらす規範的な側面を明らかにすることを通じて、以上の背景に見られた二項対立の関係に対して、新たな視点から考察するための理論的・実証的な基盤作りを試みるものである。

3. 研究の方法

(1) 規範概念の検討

エスノメソドロジーおよび会話分析研究の既存研究から得られた知見をレビューしながら、社会的場面の理解についてどのような規範が明らかにされてきたのかについて、体系的な把握および整理を行った。

(2) メディアを通じた表現の制作に関する実践の調査

主に下記の三つの表現を対象として、それぞれの調査手法とともに研究を行った。

短歌

東京都内での短歌制作グループについて行われた月一回の歌会に継続して参加しながらフィールドワークを行った。歌会においては、短歌作品の批評という行為が特定の言語や身体的動作について遂行されていく様子を観察し、一部については許可を得た上で録音・録画し文書等に起こしてデータ化した。

写真

写真撮影という表現活動をテーマに、観光写真撮影およびコスプレ写真撮影からなる二件の探求的なフィールドワークを行った。

目指したのは、「特定の意図をもった写真を撮る＝つくる」際に遂行される表現実践の社会学である。写真は社会調査のための素材、

すなわち「写真の背後に隠されている何らか」を社会学者が発見するためのデータとして長らく扱われてきた一方、「写真はそれを撮る＝つくる実践者自身にとってどのような意味を持つのか」という社会的活動の意味世界およびその構成要素である社会的規範が顧みられてこなかったからである。

商業マンガ

商業誌で作品を制作する現役のマンガ家である、すがやみつる氏、こうま・すう氏に対して複数回のインタビュー調査を継続して行った。

4. 研究成果

上記対象について、下記それぞれの研究成果を得た。

(1) 短歌

言葉を通じた表現を行なう実践者らに対する経験的研究として、以下の二点から分析を行った。

とりわけ経験の浅い歌人同士が中心となって互いに批評し学びあう集会的・協働的学びの場である歌会における情報行動を分析した。

研究者自身が短歌制作や批評に関わることを通じて、それらの実践から経験的にもたらされる理解のありようを対象化し、それらについて記述・分析を行った。

分析の結果、短歌制作に用いられる情報というものが状況に根ざしたものであることに加えて、そもそも何らかを情報として認めたり扱ったりする際に参照される際の社会的な規範として公的な基準というものが存在し、共有されていることがあきらかとなった。特に批評の実践については、制作者および鑑賞者それぞれの経験を取り扱う際に参照される規範があり、その規範を通じて社会的な場面の理解に関する日常的な規範との関わりや、実践者個人の経験との関わりが説明可能となっていてということが明らかとなった。

以上からさらに、短歌制作は様々な情報行動や社会的文脈が相互に関係し合うなかで行われており、したがって、表現実践の内実には近づこうとするには特定の情報行動を単体でのみ扱うことは不可能である、という研究方法論上の知見も得られた。

(2) 写真

観光写真撮影のフィールドワークとして、ニューヨーク市の公園を観光する家族の参与観察およびビデオ撮影を行なった。観察と分析の結果、観光写真というものは、撮影者が被写体(モノ)と関与する際に持つ実践的関心事にあわせて作られるものであること、そしてそれは普段の日常生活を構成する社会的文脈のなかに位置付けられること、この二点を論証する知見が得られた。撮影に値する基準やその時機は、既知の知識や経験に基づき判断されるものである。具体例をあげる

と、撮影者は多くの「通り過ぎてしまうもの」のなかから数少ない「興味を惹かれるもの」を選んだり、普段の生活では得られない「驚き」を選んだり、過去にメディアを通じて知ったいわゆる観光スポットやその情景を選んだりしていた。つまり写真撮影は常に何らかの選択性をともなう、秩序化された現象なのである。デジタルカメラや大容量記憶装置が普及したことによりフィルム時代の撮影に比べて写真撮影はより気軽かつ身近になったといわれるが、観光写真撮影はランダムに行われるものでは決してなかった。また、他の家族構成員との相互行為を通じて撮影に価する対象が発見される、といった興味深い事例も見られた。撮影者の撮影中、他の家族構成員は立ち止まって撮影者を待っていたり、撮影者が気づいていない被写体を撮影価値のあるものとして指摘するなど、家族構成員同士が配慮や注意を向け合うという「家族をすること」の実践のなかに写真撮影もまた位置付けられるものであることがわかった。

コスプレ写真撮影のフィールドワークとして、写真家とコスプレイヤーからなるコミュニティのフィールドワークを2年間にわたり行ない、参与観察およびビデオ撮影を行なった。観察と分析の結果、コスプレ写真撮影とは、キャラクターやそれが存在する世界観を規範として維持しつつ、その範囲内で自分たちの表現実践を記録として残すものなのである。コスプレ写真撮影は衣装や大小の道具（既存のモノ）を用いながら写真を通じた表現（いまだ存在しないモノ）を作り出す協働活動であるわけだが、ここでとりわけ重視されていたのは、作品の世界観を可能な限り維持する、という規範とその運用であった。予算や再現上の限界といった制約により表現の幅を狭めざるをえない一面がある一方、実践者らはそうした制約を参照しながら、現在自分らが実現可能な範囲での世界観の再現をそのつど相談を重ねながら撮影者とコスプレイヤーは目指していたのである。

(3) 商業マンガ

今回の対象者はいずれも、マンガをはじめとするメディアに関わる経験を、マンガ家にいたる過程において重要な経験として位置づけていた。そして、両氏ともメディアにおける情報から、自分なりのマンガ家の規範的なモデルや、自分自身がマンガ家として参与可能な作品の形式を発見したというストーリーを語っていた。たとえば、すがや氏は中学時代に講読した『マンガ家入門』やテレビのドキュメンタリー番組から、マンガ家に必要な能力を知り、それを実現するための実践として水泳部に入って体を鍛えるなどしていた。一方で、こうま氏の場合は1970年代にイラストレーションというジャンルやストーリーギャグが自身の目指すべき作風であり「これならできる」ものとして同定され

たことにより、最終的にマンガ家を目指すことを決意した。つまり、2人ともそれぞれの立場から、自己をマンガ界の中で位置づける転機を経験しており、そこではメディアから得た情報が重要な位置を占めていた。

また、今回のインタビューでは、従来指摘されているものより幅広いマンガ家と編集者との関係性や編集者以外の他者との関係性がマンガ家の規範意識獲得や仕事の拡大において重要な存在であることが明らかになった。すがや氏の語りについてみれば、すがや氏が児童マンガから実用マンガに仕事の幅を広げていく際に、編集者が果たした役割が大きかった。また、こうま氏の場合、仕事の幅を広げていった上で助けとなったのは、「舞台の照明」の仕事仲間であり、必ずしも編集者に限られなかった。

以上のことから、マンガ家に対するライフストーリーインタビュー調査では、マンガ家の規範意識獲得におけるメディア経験や他者の存在の重要性が明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Shinichiro Sakai, Ron Korenaga & Tomomi Shigeyoshi Sakai: "Learning to become a better poet: situated information practices in, of, and at a Japanese tanka gathering" *Information Research* 20(1) online (2015), 査読有
<http://InformationR.net/ir/20-1/isic2/isic30.html>

ISSN: 2187-2775

池上 賢: "メディア経験とオーディエンス・アイデンティティ 語り・パフォーマンス・エスノメソドロジー" *マス・コミュニケーション研究* 84号, pp.109-207 (2014), 査読有

ISSN: 1341-1306

是永 論: "人々における経験に根ざした「情報」へのアプローチ エスノメソドロジーに特徴づけられたエスノグラフィー" *社会情報学* 1巻3号, pp.1-9 (2013), 査読無

[学会発表](計6件)

池上 賢: マンガ家のライフストーリーに見る戦後マンガ史、日本オーラル・ヒストリー学会第12回大会、2014年9月14日、日本大学文理学部(東京都世田谷区)

Shinichiro Sakai, Ron Korenaga & Tomomi Shigeyoshi Sakai: "Learning to become a better poet: situated information practices in, of, and at a Japanese tanka gathering", ISIC: the information behavior conference, 2014年9月4日, Leeds University, Leeds, U.K.

Ebita, D. & Sakai, S. "Looking for the Adequate "Dose": Sending an Electric Impulse to the Patients' Body in Electrotherapy" International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis. 2013年8月7日 Wilfrid Laurier University, Waterloo, Canada.

Sakai, S., Ikeya, N. & Awamura, N.: "On the Practical Benefits of Visualizing Tasks." International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis. 2013年8月5日、Wilfrid Laurier University, Waterloo, Canada.

是永 論: "メディア上の語りに見られる参与枠組みの多元性 - オーセンティシティを焦点に" 日本社会学会、2012年11月4日、札幌学院大学(北海道江別市)

是永 論: "メディア上の表現行為をどのように分析・評価するか" 日本マスコミュニケーション学会、2012年10月26日、法政大学(東京都町田市)

〔図書〕(計1件)

Shinichiro Sakai; Ron Korenaga; Yoshifumi Mizukawa; Motoko Igarashi: "Envisioning the plan in interaction: Configuring pipes during a plumber's meeting", in Neville, Maurice et al. (eds.) Interacting with Objects: Language, materiality and social activity, John Benjamins, 2014, pp.339-356,393

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1)研究代表者

是永 論(Korenaga, Ron)
立教大学・社会学部・教授
研究者番号: 50275468

(2)研究分担者

酒井 信一郎(Sakai, Shinichiro)
清泉女子大学・文学部・非常勤講師
研究者番号: 00638570

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

池上 賢(IKegami, Satoru)
重吉 知美(Shigeyoshi, Tomomi)